



Title	日本最初のナースステーションについて
Author(s)	臼井, 敏明; 北村, 妙子; 濱野, 香苗
Citation	保健学研究. 2008, 21(1), p. 17-22
Issue Date	2008-11
URL	http://hdl.handle.net/10069/21291
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-30T08:20:37Z

日本最初のナースステーションについて

白井 敏明¹・北村 妙子¹・濱野 香苗²

要 旨 1857年にオランダ医師、ポンペ・フォン・メールデルフォルトによって設立された日本最初の近代的医学教育施設が設立され、1861年に教育施設の付属病院である養生所が併設された。その中に、看護人室（現、看護師詰め所）が記載されていた。本論文では、その経過と図面について解説した。設立当時にPompeから徳川幕府に提出された企画書の中に看護人室が記載されていたが、その図面は残されていなかった。明治14年（1871）になってこの病院の一部がそのまま梅毒病院（伝染病病院）に引き継がれ、その病院の図面が高木純五郎氏によって復元され、その中に看護室（看護師詰め所）が明記されている。この図面に示された看護師詰め所は日本最初の施設であると思われる。

保健学研究 21(1): 17-22, 2008

Key Words : Nurse station, History

（2008年7月19日受付）
（2008年9月12日受理）

はじめに

看護師が医師と共同で患者の治療を行う職業であることを考えると、人が生活する最初から、人間社会において病人の世話をするなんらかの作業は存在したであろう。しかし、困った人に対して世話をするという好意的サービスとしてではなく、医療についての専門的知識を学習し、独立した職業として看護が認められたのは、ようやく19世紀の前半に至って、ドイツのフリートナー夫妻による女性の職業としての看護婦の教育がなされたのに始まる¹⁾。ここで1850年と1851年の2回にわたって夫妻の教育を受けたフローレンス・ナイチンゲールが1854年にクリミア戦争に参加し、多くの傷病兵の治療、看護を行い、看護師としての職業の重要性をヨーロッパの人々に広く認識させたのが専門職としての看護師の始まりと解釈してよい。

このナイチンゲールが活躍した数年後に来日したオランダの医師、ポンペ・フォン・メールデルフォルトによって、1857年に長崎に西洋式の近代的医学校が設立された。次いで1861年には教育病院が設立され、そこに看護人と呼ばれる男性看護師が配置されていた。更に、この病院の建物を検索すると、そこに看護人室と呼ばれるナース・ステーションが設置されていた。本論文では、長崎地区で出版された文献を中心として、その経緯について検証した。

1. 日本における近代的病院「養生所」の設立

ナイチンゲールがクリミア戦争で活躍してまもなく、1857年11月12日にオランダ商館医ポンペ・フォン・メールデルフォルトにより長崎に近代的医学校である「医学伝習所」が設立され、物理学、化学などの自然科学の基

礎から始める系統的な医学教育が始まった^{2,3)}。それに引き続いて1861年9月20日に付属病院「養生所」が設立され、124床の病棟も整備されて本格的な医療行為が行われるようになった。そこで働く「看護人」が採用され、その人達の作業施設である「看護室」が設立されて、日本における専門的看護業務が開始されたといつてよい。養生所は1865年に精得館と名称が変更されている。

2. 養生所の位置と建物の外観

養生所設立の記録はポンペ自身がオランダに帰国してから執筆した「日本における5年間に書かれている²⁾。その位置は、長崎港に面した小高い丘の上に立てられ、すぐ下の海岸に面したところに中国人居留地（唐人屋敷、現・館内町）があった。その本の中には病院の建物の図面は残っていないが、幸い医学校と病院のスケッチ（図1）がこの本の口絵として描かれているので、外形はかなり正確に把握できる²⁾。当時撮影された写真（図2）も存在する⁴⁾。病棟は北病棟と南病棟が平行に並んでいる。高木純五郎氏によると、これらの建物は、オランダの軍病院と市民病院の様式によって計画されたものであると紹介されている⁴⁾。

建物の位置は現在の佐古小学校（西小島1丁目）の位置で、現在は校内に「長崎養生所跡碑」の記念碑が当時の面影を残しているだけである。以前、ポンペおよび師弟の記念像が設立されていたが、戦後の朝鮮戦争のとき金属ブームが起り、銅板の碑が盗まれそうになったので、医学史研究家の中西啓氏が確保し、長崎大学医学部に保存している。

1 長崎県立佐世保看護学校

2 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

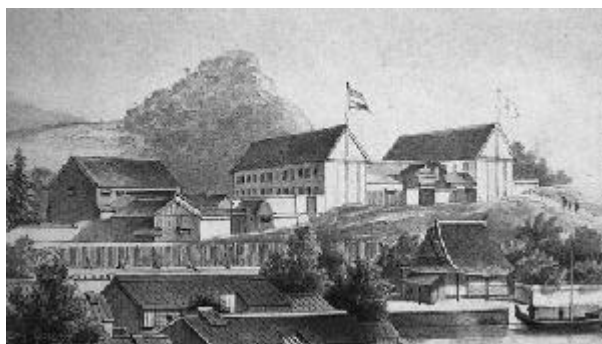


図1．開院当時（1861年）の小島養生所．ポンペ「日本における5年間」の口絵．（文献2）



図2．1865年頃の精得館（旧養生所）の写真．（文献4．p.8）

3．ポンペの記録に見られる「看護」という用語

ポンペの著書、「日本における5年間」²⁾では、医学伝習所、養生所の設立と運営だけでなく、日本で経験した日本人の生活様式、たとえば「日本人は風呂が大好きで、裸で共同風呂にはいること」など、風俗をヨーロッパに紹介する記事も含まれる。この著書の中で「看護」の文字をキーワードとして検索してみると、ポンペはこの言葉をベッドサイドでの診療に用いている。たとえば医学生の実習を「学生が行う看護」と記している。これは医師の診療と看護との分業が成り立っていないことを意味するのか、医療と看護が同等なものであったと考えられるかは意見の分かれるところである。

いわゆる看護師に対応する職種は「看護人（男性）」と記載されている。この時代は、ヨーロッパでもようやくフリートナー夫妻による女性の職業としての看護師の

養成が始まったばかりで、日本ではまだ女性が独立した職業に就くということは考えられない時代であったので、看護業務を男性が担当することは当然の事であった。中西啓氏の著述（文献3，p537-8）では、この看護人は採用に際して選抜され、一定の医学教育を受けたものとされているが、ポンペの著書にはその教育についての内容は記載されていない。ポンペは日本人の看護人について、「善良な看護人」という表現で讃えている。

4．長崎医学百年史の中の「看護」という用語

長崎大学医学部では、ポンペが1857年に医学伝習所を設立した年を創立記念日と定め、昭和31年（1956）の創立百年祭に合わせて「長崎医学百年史」を編纂した。その最初の部分に、中西啓氏によって日本における西洋医学史に始まる医学教育史が克明に記載されている³⁾。これらは前項で述べたポンペの著書を初めとして、中西啓氏が収集された江戸時代から明治時代にかけての古書を解析された結果である。本書では、その目的からして医学教育史（教育病院を含む）を中心に記載されているので、看護師については部分的にしか書かれていない。しかし、その中に看護史に関する重要な事項が記載されている。

まず、ポンペが養生所を設立したときの病院設備に関して簡単に述べられている。（資料）

このほか、「看護者」の宿泊する施設1，2軒設立すべきと記載されているが（文献3，p65），看護者は介護人を意味する。病院に入院するとき、患者の生活の世話をする看護者を受け入れるために、病院内にそれらの宿泊所を設立したことを述べている。

このように、ポンペの設立した教育病院・養生所では当初から看護人室（看護師詰め所）が設立され、看護人が配置された。ここで養成された看護人、看護長は明治時代に入り、1977年（明治10年）の西南戦争に参加し、官軍側の従軍看護師として活躍している。その時の辞令、給与などが記録されている（文献3，p.292-294）。しかし、看護人の資格、養成訓練に関する記述は私の調査の範囲内では明確には記載されていない。長崎在住の医学史研究家、中西啓氏に直接この点を尋ねたところ、看護人は男性で、採用に当たっては選抜があり、採用後も看護の教育が行われていたと述べられたが、故人となられた現在、再度訪ねて出典を明確にすることはできない。さらに悪いことに、1982年（昭和57年）の長崎大水害の折、中西啓氏が個人的に収集された多くの古書を流失されたということである。

5．養生所とナースステーションの図面

ポンペと中西啓氏の著述では、文書記録としての病院施設および看護室は記載されているが、前述の写生、写真（図1，2）を除いて具体的な図面は記録されていない。100周年記念誌発行以後、長崎大学関係者の間でい

(資料) 安政5年(1859), ポンペが提出した病院設計説明記事

中西 啓(文献3)長崎医学百年史 長崎大学医学部刊行; 1961 p.64

この病院の設計は「病院構造」(沼田郎氏著『幕末洋学史』)によれば、病人舎、各病者居所、回廊下、書役、監察官室、番医師室、看護、穢垢衣衾ヲ洗濯スル所、炊煮所、薬局、患者衣裳貯蔵所、厩、薪炭食糧貯所二軒、通融大門等の建物の他、水井、階段があり(文中の看護は、看護室か、看護衣か、不明。)³⁾、外側壁、ドワーセブロック階段門戸側立壁等の壁があり、病舎には入口戸、障子窓を付け、廻廊にも、諸種寮室にも窓を付け、諸種寮室の戸は廻廊に続ける。

(注) ()内は中西氏の注釈であるが、この文章内の項目が建築設備であること、および後述の文章から、看護室(看護人詰め所)であると思われる。

るいろな資料から推定される図面の復元が試みられた。医学伝習所は、最初(1857年)は現在の県庁近くにあった個人住宅の一部を借用して教育が始められたが、1861年に付属病院である養生所の設立に伴って、医学伝習所も現在の佐古小学校の位置に設立された(図3 A, Bの位置)。林郁彦氏⁵⁾、青木義勇氏⁶⁾の調査により、図1, 2などを参考に、図4に見られるような両施設の外郭が推定された。養生所は南北の2つの病棟が平行に並び、その間に廊下と各管理室が建てられていたと考えられる。

この建物は明治時代に入り医学所は国の医学校(長崎府医学校)として教育施設となり、養生所は長崎県病院(明治元年は長崎府病院)となって医学教育病院と市民の診療施設としての役割を果たした。

長崎県病院は明治12年から17年(1879-1884)にかけて大徳園跡(図3, C)に移転したが、養生所の建物は明治14年(1881)に改築され、長崎県立梅毒病院(伝染病院)として建物の一部が引き継がれた。この梅毒病院の病棟は養生所の北病棟をそのまま残しているものと考えられる。幸いにもこの図面が青木義勇氏によって再現され(図5)、その中に「看護室」が明確に記録されている⁷⁾。

看護室は病棟の一階中央にあり、階段の下空間を利用している。広さは2間四方(8畳、約13m²)で、階段を利用して一階、二階の病棟を一括管理していた。この構造形式はその後日赤病院をはじめ多くの病院で採用され、太平洋戦争後のしばらくの間、高層病棟が普及するまで使用されていた。



図3. 医学所・養生所跡地への案内図
 A: 日本最初の洋式病院「養生所」設立(1861, 文久元年). 明治元年「長崎府病院」, 2年「長崎県病院」となる。
 B: 移転新築なった近代的医学校「医学所」(1861)の場所。
 C: 明治3年「梅毒仮病院」設立。同12-18年「長崎県病院」が移転, 同35年まで存続。「大徳園」は江戸末期に大徳寺の庭園であった場所。現在は住宅地。

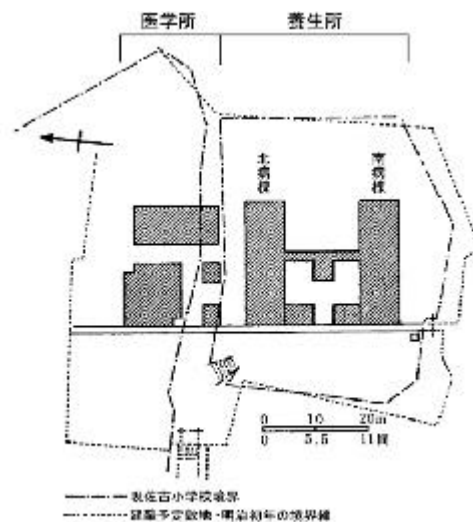


図4. 1861年(文久元年)に落成した養生所(右)と医学所(左)の林郁彦氏による推定図。(文献5 口絵, 文献6 p.78より引用)

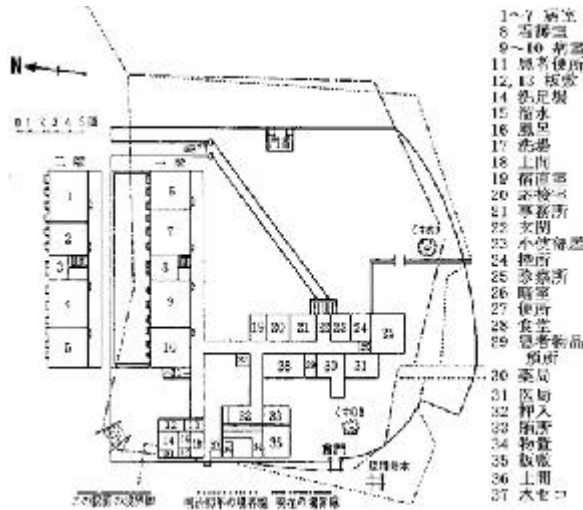


図5．明治14年（1881）に改築なった梅毒病院．
（文献6，p.81）

考 察

1．看護史の検索に当たっての留意点

看護史を検索するに当たっては、1854年にナイチンゲールがクリミア戦争で活躍し、看護専門職を世界に認知させた時点を境として視点を区別する必要がある。それ以前は、医療職の一部として記述されることはあっても、医師、薬剤師、看護師等の分業が明確でなく、看護史としての意味づけが曖昧である。特に日本ではこの点が不明確で、医学史の多くは医業すなわち医師の歴史として記録され、この医学史の上では医師の歴史が主体であり、看護師の業績についてはあまり明確には記録に残されなかった。従って、看護史を紐解くにはその隙間に書かれた看護業務と考えられる行為、用語を克明に検索することが重要である。

2．ポンペ以前の医学教育について

日本における医学教育の歴史を検索すると、ポンペが1861年に医学伝習所を設立する以前にも医学校が設立された歴史が記録されている。1555年にポルトガル宣教師ルイス・デ・アルメイダ（外科医）が豊後府内（大分）に来日し、医学校を設立したという書簡が本国に送られているが、糸賀敬氏の調査によると、当時の大分の歴史、地図を調べてみてもそのような記録は見あたらないようである⁷⁾。これらの資料には教会が記載されているので、布教のためのミゼルコルディア（慈悲屋）と呼ばれる施療施設があり、そこで日本人に医療の補助技術を教えたのかもしれない。

1823年にフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが長崎の出島にオランダ商館医として来日し、翌1824年には長崎市鳴滝に「鳴滝塾」を設立し、日本人の診療を行うと同時に、日本人医師（漢方医）に医療の講義を行ったが、特に系統的な医学教育を行ったものではない⁸⁾。しかし、出島を離れて日本人の診療を行った実績が、ポンペの医学伝習所設立の下地を作ったものと考えられる。

シーボルトは博物学者であったので、薬草園を作っている。しかし、年代がナイチンゲールの活躍した1854年以前であり、看護師という概念は教育に含まれていなかったと思われる。

3．看護人と看護人室について

ポンペの設立した医学校の付属病院である養生所には看護人と看護人室（看護人詰め所）が存在することは確実であり、ナイチンゲールに始まるヨーロッパにおける看護史の黎明期と同期とすると、1861年9月20日という養生所の設立は日本の近代的看護師の出発点となる記念日と判断してよからう。ポンペが文献²⁾で「善良な看護人」と称え、中西啓氏の文献³⁾でも医学生が夜間のベッドサイド訓練のために看護人室に宿泊したという記述も併せ考えると、人、施設共に実在したことは間違いない。但し、ポンペの文献²⁾「日本における5年間」は、医学教育の歴史の記述というよりはヨーロッパへの日本の紹介という意味合いが強く、看護人についての記述は少ない。また、中西啓氏の「長崎医学百年史」でも、長崎大学医学部の歴史的調査を目的としたもので、医師の教育、行動については詳しいが、看護師に関する記述は少ない。

中西啓氏が高齢であることも考えて、医学書院に依頼して、中西啓氏と県立長崎シーボルト大学看護栄養学部看護学科の植田悠紀子、山本富士江両教授との対談をお願いし、雑誌「看護教育」に掲載していただいた⁹⁾。しかし、この対談ではアルメイダ、シーボルトに関連した記述はあったが、ポンペの設立した医学所、養生所についての質問は少なかったようである。

ポンペの設立した医学校、付属病院での永年の努力によって看護師、看護長が養成され、日本が赤十字社に加盟する以前に既に従軍看護婦の派遣に協力したことは、日本の看護史に記録されるべき重要な記録と考えてよい。これを境に、日本でも男性看護師が女性看護婦に変わって看護業務に携わり、日本赤十字社の創設、看護学校の設立へと大きく日本の看護行政が進展した。

4．梅毒病院について

梅毒病院（伝染病病院）について一言すると、出島のオランダ商館医達は熱帯航路を經由して日本に来たこと、および長崎は清国福建省との交流が盛んであったことから、コレラ、天然痘、梅毒などの伝染病予防、治療に熱心であり、商館設立当初から悟真寺（長崎市曙町・稲佐国際墓地近く）に診療施設を設立するとともに、明治になってからも県に強く梅毒病院の設立を要望していた。これらの施療施設で働いた日本人を追跡すると、養生所以前の看護職員の実績を見出すことができるかもしれない。

おわりに

現在、日本では看護教育の変革期にあり、看護大学の設立が進展する一方で、看護専修学校の閉鎖が相次いでいる。各学校で閉校記念誌が発行され、その中に明治以来の看護教育の歴史が断片的ながら記述されている。現

在に生きる私たちには、これらを書き留めて置く義務がある。すでに1世紀を越えた歴史であることから、初代の方々の記録を完全に書き留めることは困難と思われるが、先輩から聞いた物語をたどってできるだけ記録しておく必要がある。たとえそれが不正確であっても、多くの資料を総括して判断すれば、その時代の流れを推定することはできる。記録されていない「語り部」の物語は時と共に忘れられ、その忘れられた部分を次の伝承者が勝手に自作して補充することもある。しかもその改変は、内容が面白ろ可笑しくなる方向に改造され、また聞き手が感動する方向にと変更される場合もある。このような観点から、今回は主として日本における系統的医学教育の発祥の地である長崎で発行された文献の中から、医学教育史の中に記録された看護職の歴史を追跡してみた。

文 献

- 1) Anna Sticker: Teodor und Friederike Fliedner. R. Brockhaus Tashenbuch Bd.1103. R. Brockhaus Verlag, Wuppertal und Zurich, 1989; 榊原正義, 河田一郎, 河嶋正幸訳・編集: ドイツ近代看護の黎明, 時空出版(東京)2006
- 2) J.L.C.Pompe van Meerdervort (1829-1908): Vijf Jaren in Japan 1857-1863, 2din, Leiden, 1867-1868; 荒瀬進訳, 長崎県史資料編・第三・九, ポンペ・日本における5年間, p621-724, 吉川弘文堂発行(東京)1966.
- 3) 中西啓: 長崎医学百年史, 長崎大学医学部刊行 1961年発行
- 4) 青木義勇: 長崎医科大学諸教授の医学史と洋学伝来史に関する欧文論文, 長崎談叢(長崎史談会発行, 藤木博英社印刷・長崎) V.66, p.1-45; 1982; p3, 高木純五郎論文: 長崎における最初の国立医学教育施設, p.5-12 中の p.8 図1
- 5) 林郁彦: 長崎小島養生所について, 長崎談叢: V. 14 p13-31; 1934 (口絵) 西洋学発祥地遺構(医学所, 養生所の外形)
- 6) 青木義勇: 明治初期の長崎医学校・病院概述, 特に建造物の興廃と戦時仮病院指定二回の経験, 長崎談叢 V.67:p.36-108,1983
- 7) 糸賀敬: 大分の医学史 - ルイス・デ・アルメイダを中心として -, 朋百(ポンペ) (長崎医学同窓会刊行) Vol.97, p.22-24 2003
- 8) 難波雄哉: 日本近代医学の父はポンペであってシーボルトではない, 朋百(ポンペ) Vol.85, p.16-21 2000
- 9) 植田悠紀子, 山本富士江: 対談・長崎医学史と看護; 医学史研究家中西啓先生に聞く, 看護教育41, p.1035-1039, 2000, 医学書院(東京)

The First Nurse Station in Japan

Toshiaki USUI¹, Taeko KITAMURA¹, Kanae HAMANO²

1 Sasebo Nurses' School, Nagasaki Prefecture.

2 Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences.

Received 19 July 2008

Accepted 12 September 2008

Abstract In 1857, Pompe von Meerderfort, a Dutch doctor, established a medical school in Nagasaki. There, the most recent European educational lectures were introduced, including those on science, basic medicine, and clinical medicine. In 1861, he established a hospital for clinical education, called "Youjousho". Male nurses were included in the hospital staff. Pompe's proposal for hospital construction to the Tokugawa feudal government included the name of nurse stations, but no plan for them was found.

In 1871 (Meiji 14), an infectious disease hospital was established, and one half of the Youjousho hospital was used as part of the new hospital institution. Professor Jungorou Takagi, of Nagasaki Medical College, reproduced a plan for the infectious disease hospital, in which, apparently a nurse station was described. This model was supposed to modify the Dutch military hospital and municipal hospital design. This nurse station model is the first one in Japan.

Health Science Research 21(1): 17-22, 2008

Key Words : Nurse station, History